

令和 6 年 4 月 21 日現在

機関番号：33937

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12415

研究課題名(和文) 観光者の問題行為を誘発する観光者の認知特性、思考プロセス等に関する研究

研究課題名(英文) Research on the cognitive characteristics and thought processes of tourists that trigger problematic behaviors

研究代表者

宮本 佳範 (Miyamoto, Yoshinori)

愛知東邦大学・経営学部・教授

研究者番号：60571304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、観光者の問題行為を類型化し観光者に責任がある行為を明確にしたうえで、問題行為に至る観光者の思考プロセス等を観光者に対する調査から明らかにしようとした。しかし、新型コロナウイルス(COVID-19)の影響で、当該調査を実施できなかったため、観光者の問題行為に関する性質の違いに基づく類型化、そして観光者の責任に関する考察を行った。その結果、観光者が過剰な地域では観光者が敵視されがちであるが、観光者個人の責任と言える問題は全体のごく一部であり、多くは観光地側の責任であることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オーバーツーリズムが報じられる際に「観光者=悪」のような主観的な批判が散見される。しかし、問題を解決するためには、諸問題の特性を把握したうえで責任の所在を考える必要がある。本研究において、観光地で生じている様々な問題を一定の指標からカテゴライズし、各種問題の責任の所在を明確化したことは、観光者の問題行為の対策を考える際に有益な視点を提供するものであり、社会的意義を有すると考える。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to categorize the problematic behaviors of tourists, clarify the responsible of tourists, and elucidate the thought processes of tourists engaging in problematic behaviors through surveys. However, due to the impact of the novel coronavirus (COVID-19), it was not possible to conduct the survey. Therefore, the study focused on categorizing the problematic behaviors of tourists based on differences in nature and examined tourist's responsibility. As a result, it was revealed that while tourists are often viewed negatively in overly touristy areas, issues that can be attributed to individual tourists' responsibility are only a small part of the whole, with many problems being attributed to the responsibility of the tourist destination itself.

研究分野：社会学

キーワード：観光者の問題行為 観光者の責任 オーバーツーリズム

1. 研究開始当初の背景

世界各地の観光地では、様々なタイプの観光者の問題行為が発生し、観光地の人々や観光対象に負の影響を与えている。そういった観光者の問題行為が多発するなか、観光研究の分野では、観光倫理や責任ある観光など、観光者側の行為の問題およびあり方に対する研究も進められてきた。観光倫理研究は、エコツーリズム研究のなかで比較的進んでおり、塚本(1997)やDavid A. Fennell(2006)の研究などが挙げられる。また、木村(2010)は、観光倫理に関する理論研究や主に開発者側(産業側)の観光倫理について論じている。そして、2011年にはMacCannellが“The Ethics of Sightseeing”を出版するなど観光倫理研究の重要性が認識されつつある。

そういった動向の中、私もこれまで継続して観光者倫理や観光者の行為の問題について多面的な研究を行ってきた。そのなかで、観光者の問題行為の要因についても既に論じている。しかし、それらの研究も含めて、従来の観光倫理研究は、倫理的な問題を指摘したり、課題を提示するにとどまるものが多く、「なぜ観光者はそういった問題行為を行うのか」について研究したものはほとんどみられない。また、多くの場合、観光地側にとってマイナスの影響を及ぼす行為が非倫理的行為として扱われてきた。しかし、観光の現場では、観光者自身が何らかのリスクの高い行為を行うなど、マイナスの影響を受ける対象が自分自身である場合が多く存在し、問題になっていることを知った。自分自身にマイナスの影響が及ぶ行為の場合、当事者の「倫理」で捉えるには限界があり、「非倫理的行為」としてではなく「問題行為」としてより幅広く捉える必要性があるという認識に至った。

そこで、本研究では、なぜ観光者は問題行為を行うのか、を全体的な問いとしつつ、さらに問題行為を主にホスト地域にマイナスの影響を与えるような行為に限らず、行為者自身や集合体としての観光者側が直接・間接的にマイナスの影響を受けるような観光者の行為も視野に入れ、なぜ観光者がそういった行動を選択するのか、について研究していく。

【文献】

- Fennell, D. A., 2005, *Tourism Ethics: Aspects of Tourism*, Channel View Publications.
- 塚本 圭一、1997、「持続可能な観光時代への観光倫理について」『北見大学論集』(37).
- 木村 勝彦、2010、「観光の倫理的考察に向けて グローバリズムと開発の視点から」『哲学・思想論叢』28、筑波大学哲学・思想学会
- MacCannell, D., 2011, *The Ethics of Sightseeing*, University of California Press.

2. 研究の目的

本研究では、上記の背景を踏まえ、「観光者はなぜ問題行為を行うのか」を考察する前段階として、観光者がどのような行為を問題として認識しているのかを明らかにする必要がある。そのうえで、観光者の問題行為のうち、自らにとってリスクのある行為(ハイリスク行為)に注目する。もちろん、観光者を受け入れる側は、観光者が事件や事故にあうことなく安全に旅行できるよう、観光者の受入れ態勢や観光システムの改善など、治安の維持など、さまざまな予防策を講じている。しかし、観光者自身がある意味危険性を知りつつ行う以上(ときにはあえてリスクを求めることもある)観光地側のそういった対応等で解決に向けて大きく前進しているとは言い難い。したがって、観光地側の対応だけでなく、当該行為を選択する観光者自身に焦点をあて、観光者自身がハイリスク行為をしないようにするようなアプローチが必要である。しかし、そういった観光者の思考等に焦点を当てた実証的研究はほとんど行われていない。

そういった状況から、本研究の目的は、ハイリスク行為等の問題行為を行う(選択する)ことにつながる観光者の認知特性・思考プロセスなどを明らかにすることを通して、観光者の問題行為の予防およびリスク管理に資する基礎的な知見を提供することである。具体的には、「観光者はそもそも何故問題ある行為を行う(選択する)のか」という問いに対し、観光者の問題行為の背後にある観光者の認知特性や思考プロセス、それらの形成に影響する社会文化的背景等を、主に観光者に対する調査から明らかにしようと試みる。それにより、観光者の問題行為の予防およ

び観光者自身のリスク管理に資する基礎的な知見を提供したい。

3. 研究の方法

本研究は2つの課題に分けて実施する。まず、第1課題として、「観光者はなぜ問題行為を行うのか」を考察する前段階として、観光者がどのような行為を問題として認識しているのかを明らかにするために、観光者の問題行為を性質による分類を行う。オーバーツーリズムという問題が広く叫ばれるなか、観光地で生じている様々な問題がオーバーツーリズムの問題として報じられるなどの現状があり、諸問題を正しく整理する必要がある。具体的には、観光者の問題行為としての認識の有無などの基準を基に分類し、観光者に責任があるといえる問題とそうではない問題を明確化していく。研究方法としては、観光者に対する調査および文献研究とする。調査では観光者自身が観光者としてどういった行為を行うことが問題として認識しているのかに関する聞き取りを行う。

さらに、問題ある行為を行う観光者に対する聞き取りを行い、その行為を行う選択に至る背後にある認知・思考プロセス等を明らかにする。これまでの観光者倫理に関する研究で実施した観光者へのインタビュー等から、観光者が問題行為を行うに至る過程で、認知バイアス(正常性バイアスや確証バイアスなど)および認知的不協和が存在し、思考と行為に影響を及ぼしているという仮説を得ており、本研究課題ではその仮説を、問題行為の類型化を踏まえて検証する。

第2課題としては、自らにマイナスの影響が及ぶようなハイリスク行為を行うことも問題行為の一種として捉える。そのうえで、なぜそういった行為を行うのかにアプローチする。仮説としては、そういったリスクの高い行為を行う背景にも認知バイアスの存在等があると考えている。これは、これまで行ったツアー登山者の安全管理に関する研究の過程で得た仮説である。その仮説を観光者に対する聞き取り調査から検証し、観光者のリスク認識とリスク管理に関して、観光者の思考を明らかにしていく。

なお、いずれの調査も、旅行中の主に日本人自由旅行者(現地ツアー参加者を含む)に対する聞き取り・行動観察等を行う計画であった。日本からのツアー等であれば旅行会社等の対応である程度問題行為を防ぐことが期待できるが、自由旅行者の行動(現地でのアクティビティ選択を含む)は個人の倫理に依拠する部分が大きく、本研究の対象として適している。また、現に旅行中の観光者にアプローチするのは、帰国後の観光者の場合、振り返りの過程で現場での自分の考え方とは異なる合理化や解釈、意味付けがなされる恐れがあるため、観光者のリアルな思考を捉えるためには、現に旅行中の観光者に対する聞き取り等を行う方法が妥当であるためである。

ただし、「研究成果」の項目で述べるが、上記の観光者に対する調査は、新型コロナによるパンデミックの影響で海外旅行が制限されたため、調査は実施できなかった。観光者の問題行為の分類に関する研究の部分は、調査によらずに整理する方法をとることとなった。

4. 研究成果

当初の研究計画では、第1課題、第2課題共に旅行中の観光者に対して聞き取り調査を実施する計画だった。しかし、2020年度から新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が世界的に蔓延した影響により、国際的な移動が制限され、予定していた調査を行える状況ではなくなった。その後、徐々に規制は緩和されたものの、新型コロナの感染症法上の位置づけが2類からインフルエンザ等と同じ5類に移行したのが本研究課題最終年度の2023年の5月であった。その他、病気に罹患したこともあり、計画していた海外における調査を実施できる状況ではなくなった。

そこで、研究テーマを大きく変えない範囲で、海外調査ではなく、文献研究等により研究をすすめる方向へとシフトさせて対応することとした。そこで、第1課題のうち、旅行者に対する聞き取り調査や行動観察を踏まえて問題行為認識を類型化する研究について、文献研究およびこれまでの研究に基づいて研究をすすめられるように若干問題意識を修正し、オーバーツーリズムの諸問題を観光者の認識等の側面から整理し観光者の責任について考察する研究を行った。以下に記す研究成果については、すべて宮本(2022)による。

新型コロナ前から「オーバーツーリズム」が問題となっており、世界各地の有名な観光地で起きている現象についての報道も多い。オーバーツーリズム問題が報じられる際に「観光者=悪」のような取り上げ方が散見されるが、問題を解決するためには、観光者を感情的に批判するので

はなく、それぞれの問題の特性を把握したうえで責任の所在を考える必要がある。そのために、まずオーバーツーリズムの諸問題について、問題の原因や行為主体の違いから区分した(図1)。

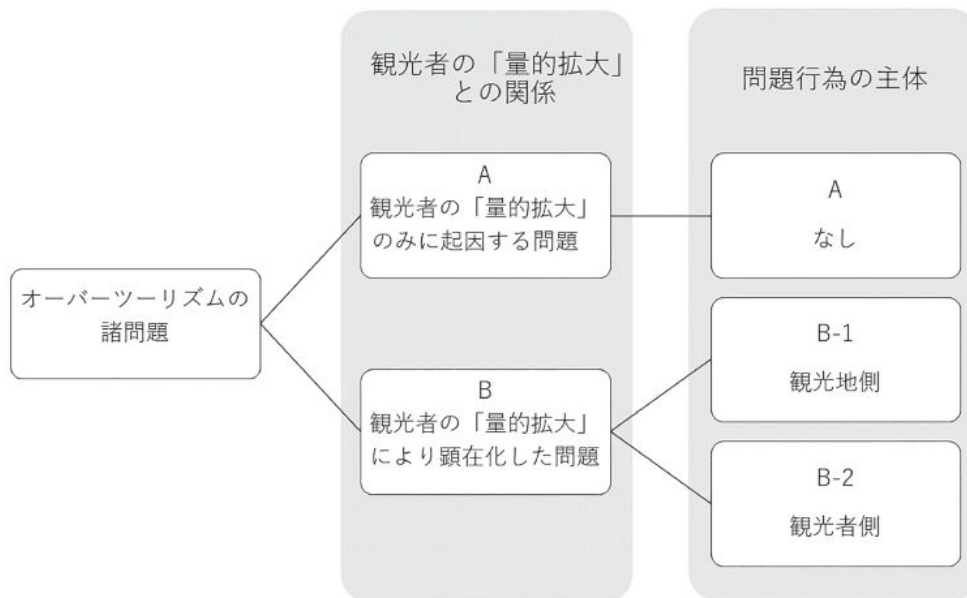


図1 オーバーツーリズムの諸問題

さらに、観光者による行為自体が直接的に問題を引き起こしているB-2タイプ(観光者の「量的拡大」により顕在化した問題、つまり観光者の数にかかわらず従来から存在していた問題のうち、その行為主体が観光者側であるタイプの問題。例えば観光者によって行われる様々な迷惑行為、マナー違反などである。ゴミのポイ捨て、禁止された地域での写真撮影、観光対象への落書き行為、舞妓パパラッチなどがここに含まれる)についてさらに問題行為認識の有無や明かな過失の有無などから問題の種類を細かく分類した(図2)。

もちろん、こういった具体例の分類に関しては異論もあるだろう。また、どこまでが観光者として当然知っているべきことであり、どこからが明らかな過失があると言えるのかについては別途議論が必要である。しかし、こういった分類をすることで、観光者の問題行為の性質の違いを知ることができる。

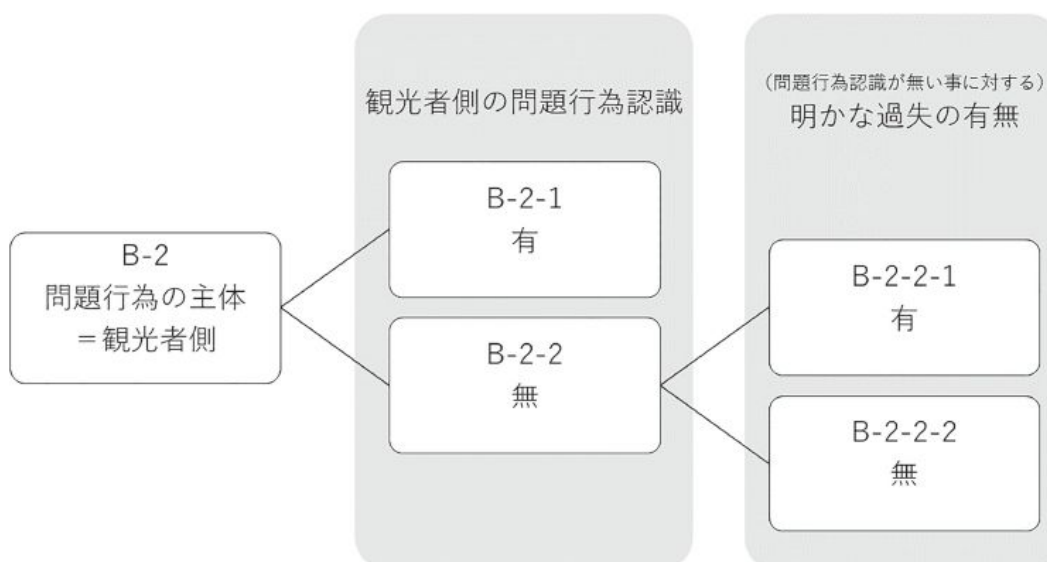


図2 問題行為の主体が観光者側である場合

そのうえで、性質の異なる問題について、問題のタイプ別に「責任」の所在について考察した（表1）。

表1 観光の諸問題に対する責任

問題のタイプ	観光地側の責任 (行為責任・管理責任)	観光者側の責任 (行為責任)	観光者送出国側の責任 (教育責任)
A	◎	×	×
B-1	◎	×	×
B-2-1	○	◎	○
B-2-2-1	○	○	◎
B-2-2-2	○	×	◎

以上の研究の結果をまとめると、オーバーツーリズム問題の多くはキャリング・キャパシティを“オーバー”したことで生じる問題というより、従来から存在した問題が顕在化だということ、それらの問題のうち観光者個人の責任と言える問題は全体のごく一部であり、多くは観光地側の責任であること、観光者の行為により発生する問題を低減するためには観光者送出国側の責任で観光者教育を行う必要があること、などが明らかになった

なお、観光者に対する聴き取り調査等により行う計画であった第1課題の後半および第2課題については、新型コロナの影響等により調査を実施できなかったことから、研究成果を残すことができなかった（予算もほとんど使用していない）。その部分は、問題意識や計画を若干見直したうえで2024年度からスタートする新たな科研費による研究課題に引き継いで実施するものとする。

【文献】

宮本佳範、2022、「オーバーツーリズムの諸問題と責任に関する考察 - 観光者の認識と責任の明確化に向けたタクソノミーの試み - 」『東邦学誌』51 (1), 1-13.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮本佳範	4. 巻 51 (1)
2. 論文標題 オーバーツーリズムの諸問題と責任に関する考察 - 観光者の認識と責任の明確化に向けたタクソノミーの試み -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東邦学誌	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20728/00000574	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------